

多摩デポ通信 第16号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2010年10月1日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

● H P / <http://www.tamadepo.org/>

● E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

多摩地域公立図書館

一冊本の蔵書検索

ボランティア募集

多摩地域の図書館では毎年多くの資料が大量に廃棄処理されています。また、各自治体では所蔵する最後の一冊が廃棄対象となる資料も増えてきており、書庫スペースを圧迫し始めている館もあります。

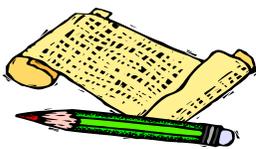
こうした中、多摩デポでは、共同保存図書館に向けた準備行為として、各自治体での廃棄予定資料の中で、その館の最後の一冊本が、

多摩地域での最後の二冊本

(多摩地域で最低二冊を保存する方向)に該当するかを検索し、該当する場合は保存シールを貼付し、将来、共同保存図書館で蔵書として保存すべき資料であることを明確にする事業を行ないたいと考えています。

昨年は、日野市立図書館が、共同保存図書館の趣旨について賛同し、この事業を行いました。多摩デポも部分的にはありましたが、ボランティアとして検索作業に協力し、今年度も引き続き立川市でこの事業を行なう予定です。

日程、検索件数など詳しく



立川市にやってきた 国文学研究資料館・見学会

10月23日(土)午後1時30分～4時30分

集合は1時15分まで(とくに時間厳守)

会場：国文学研究資料館

多摩都市モノレール立川北駅より2分高松駅下車 徒歩7分
中央線立川駅北口バス2番乗り場より裁判所前下車徒歩5分
立川市緑町10-3 (電話：050-5533-2900)

集合：国文学研究資料館入口に午後1時15分まで

(モノレール 立川北発 12:41 12:51 13:01)

参加費：無料 定員：30人 先着順(事前申し込み優先)

申し込みはメールかFAXで **NPO法人共同保存図書館・多摩**

第9回多摩デポ講座……NPO会員だけでなく、どなたでも参加できます

いことはまだ決まってお
りませんが、事業開始に先立
って、ボランティア（無償）
として検索に協力してくだ
さる方を募り、準備を進め
たいと思います。

自宅のパソコンで横断検
索ができる方、ノルマはあ
りませんので少しでも協力
してください。ボランティア
登録をお願いいたしま
す。作業開始時期によつて
は検索に参加できない場合
もあるという方も、事務局
で調整いたしますので、応
募歓迎です。

作業内容

（作業マニュアルは別途
用意、検索件数も希望に
応じて調整）書誌事項が
書かれた一覧リストをも
とに、都立図書館サイト
にある横断検索を行う。

◎氏名、連絡先電話番号、
メールアドレスを明記の

上、事務局までお申し込
みください。

応募先メールアドレス..
depo_tama@yahoo.co.jp

役員の変更について

理事辞任 黒子恒夫
理事新任 矢崎省三

前号の総会報告で伝え
ましたが、当法人生みの親、
黒子恒夫さんが健康上の
理由で辞任され、矢崎省三
さんが選任されました。矢
崎さんに書いてもらった
自己紹介を掲載します。

5月30日2010年度
多摩デポ総会で黒子さん
の後を引き継いで理事を
させていただくことにな
りました矢崎省三です。理
事の要請は現役を退いた
から、とのこと、私も³⁵
年勤めた東京農工大学図

書館を昨年3月に退職し
たところです。

大学図書館では当時始ま
ったばかりの電子図書館に
取り組み、Webサイトの開
設（97年）やインターネット
を使った利用教育、電子
ジャーナル・ブックの導入
などをしてきました。また、
大学博物館所蔵の蚕織錦絵
を電子化するなど電子化に
よる資料保存も他の大学に
先駆けてやってきました。

国立大学図書館は、地域
との関係もあまりなかった
のですが「子供インターネ
ット教室」や「大人のため
のインターネット講座」を
開催し、06年には小金井市
立図書館と相互協力協定を
結ぶなど地域貢献にも勤め
てきました。

こうした経験を多摩デポ
に活かせればと思ったので
すが、あいにく使いこなし
たハード、ソフトも自宅に
はなく、PC技術の進歩に

もついて行けず、なかなか
思うに任せません。とはい
え体力はまだありますので
力仕事に使ってください。

総会の時にも簡単な挨拶
をさせていただきましたが、
定年退職のこの歳になると
まわりにも不幸が起こるよ
うなる。葬儀の時困るのが
香典返し。慌ただしい中香
典返しをすることは大変だ。
一方頂く方も主旨からして
嬉しいものではない。昔と
違い商品を選べるようにな
ったのでまだ良いのだが、
それでもちようどほしかつ
たものがこれで賄えたなん
てことはあまりない。たい
がいはどうでもいいものが
増えてしまう。

だったらこの香典返しを
「故人のたつての希望」と
して図書館関係に寄付をし
てはどうか。と言うのが私
の挨拶の主旨でした。

図書館人はいくら図書館

が好きでも、財産を寄付するのは難しい。しかし、香典返しなら先の理由から一石二鳥、いや一石三鳥にも四鳥にもならないだろう。葬儀ではあらかじめ本人が書いておいた「香典返しは図書館のために寄付させていただきます」旨の遺言書（主旨書）を配る。こうした運動を進められないだろうか。なんとたつて故人の遺志なのだから文句も出るまい。まだ死ぬ気はないが、とりあえず私は女房に遺言として「多摩デポに寄付する」よう伝えてある。

そんな話をした12日後、私はさる温泉場にいた。温泉が好きで、それも普通の温泉ではなく、山の中に自然に湧いている温泉を探して入るのを何よりの楽しみとしている。

この温泉場付近は有数の硫化水素発生地として知られていて、いたるところが

立入禁止になっている。この立入禁止地区から少し離れた崖に温かい川が流れ落ちていた。こうした川の源流に源泉が湧き出していることが多い。試しに遡ってみると覗んだとおりに素晴らしい源泉がどうとうと湧き出していて、湯の溜まり、つまり天然の浴槽ができていた。あまりの素晴らしさについて我を忘れて入浴してしまつた。

いきなり動悸がした。すぐに息が苦しくなつた。硫化水素ガスが頭をよぎり駆けだした。タオルが落ちたのもサンダルが脱けたのもかまわず、とにかく人が見えるところまで逃げようと思つた。しかし、苦しさはどうしようもない息ができない、足も動かない。もうだめだと諦めかけたとき風が吹いた。

まさに危機一髪、どうやら助かつたようだ。が、す

ぐに私は大変まずいことに気がついた。なんせ素っ裸なのだ。駐車場にいたる崖は両手を使わないと下りられない。このまま人前に出るわけにはいかない。一難去つてまた一難だ。しばらく逡巡してやはり服を取りに戻ることにした。風が吹いていることを確認し、ひつたくるように服を抱えて走つた。しかし、この格好で、まるで亭主が帰ってきてしまい慌ててベランダに隠れた「間男」じゃないか（経験ないけど）。

八甲田山で火山性ガスのため中学生が亡くなったのはちようど一週間後だった。死を覚悟したとき、例の遺言が頭をよぎつたかどうか記憶がない。

（詳しい顛末は11月に発行するエッセー集で）

**図書館総合展
ポスターセッション**
今年も出展します

日程：11月24日（水）～26日（金）
場所：パシフィコ横浜

——お立ち寄りください！

●ブックレット第3号
発売中！読んで下さい

多摩デポブックレット
『地図・場所・記憶』

芳賀 啓 著
けやき出版発売
（または直接事務所へ）



■第8回多摩デポ講座 報告

アサヒタウンズと山田優子記者の37年半

多摩の地域情報を発信し続けた『アサヒタウンズ』が2月に突然廃刊となった。創刊以来のタウンズ記者、山田優子さんに「元アサヒタウンズ記者が語る 多摩を歩いて37年半 〜街・人・暮らし、そして図書館〜」と題し講演していただいた。7月9日、国分寺労政会館、参加者32人。



山田優子記者が語る 多摩の取材

松尾昇治
(元昭島市民図書館員)

「アサヒタウンズ」の創刊は1972年11月4日。当時大学四年生であった山田優子さんはタウンズの記者として採用され、以来37年半を多摩地域の取材に奔走してきました。70年前後の時期は高度成長のただなかにあり、多摩地域も急

速に都市化が進行し、地域の情報を求める住民が増えつつあるときでした。タウンズは朝日新聞の姉妹紙として主婦層をターゲットに、多摩地域に密着したタウンズ紙をめざし創刊されました。創刊当時は、地域のイベント情報欄を埋めるのに苦労されたようで、山田さんは各市の広報課や公共施設を廻って取材をされていたとのこと。

同じ頃、多摩の公共図書館は都の図書館政策によって、各市町がつくり始めていました。私が就職した昭島市民図書館は、タウンズ創刊から6ヶ月後の73年5月12日の開館でした。山田さんは開館したばかりの昭島市民図書館にも取材に来られました。矢野有館長が絵本原画展の取材に熱弁を振るわれたことを、山田さんは講演で話されました。私が初めてお会いしたと

きのエピソードを（山田さんのご了解を得て）紹介いたします。地域資料として受け入れた「成蹊大学文学部紀要」を見ていたら、卒業論文一覧がありました。そのなかに「山田優子」という名前があることに気付いたものですから、もしやと思ってお尋ねしますと、「どうして知っているのですか」と驚かれましたので、紀要をお見せした次第です。以来、仕事としての図書館のこと以外にも、組合活動でのイベントや市民運動の紹介などの記事をお願いすることが多々ありました。

映画「柳川堀割物語」の上映運動は大成をおさめました。図書館を退職する前に力を入れた「中高校生の読書フォーラム」事業は写真入りで大きく取り上げてもらいました。

山田さんは多摩の取材を通して多くの記事を書いて

こられました。そのなかから二、三のトピックを紹介されました。特に73年4月に取材した青梅市の山崎桃磨さんは「草木染」の染織家(第22号掲載)。山崎さんの手法はまったく薬品を使わず自然のものを使って染める。肌につけるものに薬品を使ったのでは体に良くない、家族の健康を思っただ染めているものだから薬品を使わない。千年前と同じ手法は染めの原点。このことをみんなに伝えたいとの思いが記事になったと山田さんは述べていました。ところが、タウンズに載り有名になり弟子入り希望者が増えて、今では草木染の普及活動(教えること)もさされているそうです。

これは一例ですが、多摩にこのような素晴らしい活動をしている人がいるから取り上げたいという山田記者の取材の基本姿勢からい

くつもの感動記事が生まれました。一方で、「読者の声」が励みになって私の仕事を支えてきた」と述べていました。情報の伝達手段のない人たちに光をあてたい。そして、情報の受け手も誰かが伝えてくれなければ情報が入らない。そこに記者の務めがあるとも述べていました。記者という職業の基本を教えられました。資料や情報の提供に携わる図書館の仕事にも共通するものを感じました。

今年3月25日、突然「今週で廃刊。ご愛読感謝します」の紙面を見て、びっくり仰天してしまいました。どうして廃刊してしまうのか、この経緯が山田さんから語られました。

タウンズの経営は本社販売局からの補助と販売店からの補助および広告掲載料によっている。タウンズは朝日新聞に折り込まれ、五

十万部を多摩全域に配布しているが購読料収入はないところが、朝日新聞社の広告掲載料収入が年間百億円の減収。携帯電話やインターネットの普及に加え、活字離れという社会現象に長引く不況が追い打ちをかけた。新聞の購読数も大幅に減少して、経営環境が悪化し、タウンズへの補助が打ち切られてしまった。さらに販売店も折り込み広告の収入減などと同じ状況に置かれ、タウンズへの補助ができなくなってしまう。この期に及んでタウンズの経営者は何らの再建策も考えずに、昨年12月に廃刊を決定してしまつた。

多摩地域の唯一の情報紙であったタウンズ、多摩の文化を情報の面から支えてきた37年半の歴史は大きな意義があります。多摩の人々は情報を発信する側も受け手も、共にタウンズを

頼りにしてきました。その責任を果たさないうで廃刊にしてしまう経営者の無責任を多摩の読者は感じ取っています。

復刊の見込みに、山田さんは「新聞は、印刷するまでは努力すればできるけれども、配布手段がないとできない。」と述べていました。なるほどですが、今まで築きあげてきた多摩の情報ネットワークを失いたくはありません。図書館は地域の情報拠点と言われていますが、多摩の図書館にその力があることを期待したいのは私だけではないはず。なお、廃刊後アサヒタウンズ本社から「アサヒタウンズ製本版」が立川市立図書館と小平市立図書館に寄贈されています。

このまま終わってしまうのか??



山田さん講演会感想

図書館員（匿名希望）

「どこから来たの？」と聞かれることがある。それが遠い場所、例えば大阪や仙台だったなら、「東京です」と答える。しかし、場所が都内だったり、横浜や浦和などの近隣大都市になると声のボリュームは下がる。地域をしばって答えなければならぬからだ。

「ミタカっていうところなんだけど：吉祥寺は知ってる？その隣の駅で：」と濁すように答えて相手の様子を伺わなければならぬ。もちろん、大阪で「東京です」のあとに「あ、オレも前は目黒に住んでてさあ」などと相手が始めれば同じく濁す。しかし、旧友と会えば「吉祥寺も変わったわねえ」「昔はよかったわ」と懐かしみながら新しいお店

をひやかし、家と同じ通りの畑が郊外型店舗になったことを嘆きながら買い物済ませて、多摩地域から離れる気は全くない。このような私の歪んだ多摩への愛は、なぜ歪んでいるのかいままですっと不思議だった。

今回の山田さんの講演で「多摩地域の多様性・多面性」という言葉を聞いて、この私の謎は氷解した。多摩地域が様々な姿を持っていくから私は愛したり憎んだりころころと惑わされる。短所も長所もあるけれど、多摩地域とは、今でも成長し続けている、掘っても掘っても話題の尽きない鉱山だったのだ。

多摩地域の宝を掘り出し教え続けてきてくれた「アサヒタウンズ」。その「アサヒタウンズ」を産み育ててきた山田さんのお話はとても楽しく、悲しく、未来への希望を暗示する映画のよ

うだった。クビを切りやすいからという理由で始まった学生か主婦の女性ばかりの記者たちが、多摩地域のニーズをしつかりとつかんでいたこと、さらにはそのための地道な、見えないはずの努力も他紙をも含む周りから評価されていたにも関わらず、いろいろな事情で「アサヒタウンズ」は廃刊となってしまった。

思春期の子どもが親を語るようにしか多摩地域を語れない私には、等身大の多摩地域の情報をまとめたうえで、最終的には「ここっでいいよね、最高だよね」と結論をきちんと出し、地域住民に配信し続けてきた山田さんはとても素敵だ。「アサヒタウンズ」は最期まで看取れたということにして、これからも発信を続けてほしい。「アサヒタウンズ」自体だけでなく、「アサヒタウンズ」紙から産まれ

た膨大な資料の一部も失われてしまったと伺った。代償は大きかったけれども、そのかわりに自由を得た山田さんの今後のご活躍を期待している。

来年の「第 97 回全国図書館大会」は、多摩で行われます！ 今年の奈良で配られたチラシには、キャッチフレーズ「来年は『市民の図書館』実践の地、東京・多摩でお会いしましょう」とある。開催日は 11 年 10 月 13 日(木)、14 日(金)。主会場は調布市グリーンホール。「共同保存の分科会」の構想も。

「市民活動資料センター基金」の活動について

町村敬志

市民活動資料・情報センターをつくる会 (一橋大学)

今年 7 月、「市民活動資料センター基金」を設立するための会が、立川で催された。開催したのは「市民活動資料・情報センターをつくる会」(以下、資料センターの会)、2006 年から市民資料保存をめざして活動を続けている民間のグループである。

「資料センターの会」の活動はもともと、立川市にあった都立多摩社会教育会館に開設されていた「市民活動サービスクーナー」が、02 年 3 月に廃止されたことに端を発する。多摩地域市

町村の広範囲な市民団体に對して、印刷機器や集会スペースの提供、相談や助言業務などを行っていた同コーナーは、1972 年の開設以来、関係する資料の収集と提供に力をいれてきた。その結果、30 年間に、2600 タイトル以上のミニコミ等をはじめとする、多数の市民活動資料を収集するに至っていた。

ところが、コーナー廃止により、膨大な資料は散逸の危機に直面する。その後、コーナーの元職員と利用者らが設立した「市民活動サポートセンター・アンティ多摩」の努力によって、段ボール 500 箱に及ぶ資料はミニコミ等を中心に何とか保持されてきた。この間、図書館等での再公開に向けた活動を続けてきたが実現には至らず、当面の保管場所探しも綱渡りの状況が続いてきた。そこで、これら

保管資料の保存と公開に加え、さらに新たな市民活動資料の収集と活用のためのセンターづくりをめざして結成されたのが、「市民活動資料・情報センターをつくる会」である。筆者もまた、この「資料センターの会」結成のときからお手伝いをさせていただいてきた。

市民活動資料に筆者が実際に出会ったのは、1980 年代前半のことだった。開発や環境をめぐる住民運動、そして反核運動などを進めている団体や個人を訪ねるなかで、多くの方が日常の活動の一環として手作りのミニコミやパンフレットを作成しているのに出会った。やがて、愛知県内の市民派の議員さんが発行するミニコミの読者調査に参加したり、80 年代末から増加した外国人住民向けのエスニック・メディアの作り

手調査を行なったりするなど、広義の市民活動資料とそれを支える社会的ネットワークにも関心をもつようになっていった。

市民活動資料とは、第一に、日常の世界に根ざしながら暮らしを支え、また社会を変えてきたさまざまな担い手たちが相互の経験を共有し合い、それを現場に生かすための拠り所としてある。それはまた、第二に、市民社会の形成と成熟に向けて、後に続く世代と、時間・空間を越えた交流を進めるための基盤としてある。IT化の進む現代だが、むしろそうだからこそ「現物」が若い世代にとって強いインパクトをもつことを、筆者は大学で痛感してきた。そして第三に、市民活動資料は、私たちの暮らすこの世界が、国家・政府や市場・企業の世界とは異なる諸力や知恵によっても支えられ

創造されていることを、内外に向けて気づかせてくれる大切な源となる。

「資料センターの会」では、行政や大学、企業などで資料を引き取ってもらえそうなどころを探したが、財政難やスペースの不足等の理由で実現しなかった。このため、市民の自主的な力でそれを実現しようということになり、冒頭のように「市民活動資料センター基金」を設け、募金運動を開始した。センターは、資料の保存・活用のあると同時に、さまざまな市民活動の拠点、また、公・民の市民活動資料所蔵機関のネットワークの結節としての役割も果たしていかねたらと考えている。

人の世界と同様、資料の世界もまた「つながり」を生かすことによって、真の豊かさを実現することができる。本会も、「共同保存図

書館・多摩」の理念と活動からも大いに学ばせていただいてきた。

ご関心をお持ちの方のご支援を、ぜひともよろしくお願いいたします。

詳細は

<http://homepage3.nifty.com/simin-siryof/>

■ブックレット第4号

予告！

『現在いまを生きる地域資料

—利用する側・提供する側—

というタイトルで、11月

中旬発行を目前に作業中。

「利用する側」は、全国の図書館を訪ねて雑誌『信用金庫』に記事を連載している平山恵三さん、そして「提供する側」は、資料保存の原則を踏まえて丁寧な地域資料サービスを行っている小平市図書館の前館長蛭田廣一さん。それぞれの講演を元にしていきます。

★会の現勢

2010年9月25日

現在

●会員

(個人会員106名)

(団体会員3団体)

●賛助会員

(個人42名)

(団体2団体)

今年度会費の振込みがまだの方は、入金をよろしくお願いたします。

●年会費

正会員(個人・団体)

五千元

賛助会員一口 二千元

(個人一口団体五口以上)